

# 1818年から1819年における P. B. シェリーの詩作品群

池 田 景 子

## はじめに

1814年7月にパーシー・ビッシュ・シェリー (Percy Bysshe Shelley) は、妻子のある身でありながら、メアリ・ゴドウィン (Mary Godwin) と駆け落ちをする (以下、パーシーとメアリという呼称で統一する)。その後、パーシーの妻、ハリエット (Harriet) が自殺を図り、パーシーとメアリは正式に結婚をするに至る。パーシーにとって、生涯メアリは文学者として重要なパートナーであることに変わりはなく、二人が互いに作家として分かち合ったものはおそらく計り知れないだろう。しかし、二人の関係や二人を取り巻く環境は必ずしも順風満帆とは言えず、二人は苦難をも共にすることになる。例えば1815年にパーシーとメアリの間に長女が生まれるが、未熟児だったため10日程度でこの世を去る。翌年1816年には長男ウィリアム・シェリー (William Shelley) が生まれ、1817年には次女クレアラ (Clara) が生まれるが、クレアラは1818年に、ウィリアムは1819年に亡くなる。3人もの子どもを亡くしたメアリが受けた精神的打撃はあまりに大きく鬱状態が続き、パーシーとの結婚生活にも暗い影を落とすことになる。このように1818年後半から不幸な出来事が連続する一方で、パーシーは1819年には頌歌「西風に寄せるオード (Ode to the West Wind)」、劇詩『鎖を解かれたプロメテウス—四幕から成る抒情劇 (Prometheus Unbound: A Lyrical Drama in Four Acts, with Other Poems)』及び『チェン

チー族—五幕から成る悲劇 (*The Cenci: A Tragedy in Five Acts*) 』など傑作を生み出していく。1818年終わり頃から1819年は、パーシーの詩的才能が大きく開花した「驚異の年 (annus mirabilis)」なのである (Curran, preface xiii)。だが、パーシーを襲った不幸はその心に深く刺さり、その絶望的な心境を綴った詩作品も生み出されていた。本稿では、1818年から1819年に執筆された詩作品 7 編を取り上げ、テキストの翻訳をした後、各作品の執筆背景を紹介していく。

## 1. テキストの翻訳

「失意のうちに書かれた詩節—1818年12月ナポリ近郊にて」

太陽は暖かく、空は晴れている。  
波は燦々と輝き、目まぐるしい動きを見せながら踊っている。  
青い島と、雪で覆われた山は  
深紅色をした、真昼の透明な力をまとっている。  
水気を含んだ大地の吐息は  
まだほころびていない蕾のまわりでふんわりとただよう。  
ひとつ喜びを語る多くの声のように  
風や鳥や海がある。  
都市の声そのものも、孤独のようにやわらかだ。

僕は未踏の海面に  
緑や紫の海藻がばら撒かれているのを目にする。  
そして、海岸に打ち寄せる波が  
流星雨に溶けた光のように、投げかけられるのを目にする。  
僕は砂の上に腰を下ろす。  
真昼の海に光る稲妻が

周りで閃き、ひとつの音が  
その規則的な動きから生じる。  
なんと甘美なことか！あらゆる心が今、僕の感情にあやかっただの。

悲しいかな！僕には希望も健康もない。  
心になごみも周囲に平穏もない。  
賢人が瞑想のうちに見出し、  
内面の栄光を戴いて闊歩したような  
富を上回る充足感もない。  
名声も力も、愛も安逸もないのだ。  
こういったものに囲まれた人たちが  
生を歩み、人生を喜びと思うさまを見て僕は微笑む。  
僕にはその杯は違った寸法のものとして授けられたのだ。

だが今や、絶望そのものは  
風や海と同様に軽い。  
僕は疲れた子どものように横たわり  
悩みの人生に涙することもできよう。  
これまで抱えてきて、これからも  
死が眠りのように忍び寄る時まで、抱えていかねばならない。  
そして僕の頬が冷たく、海が  
死にゆく僕の頭上で、最後の単音をささやくのを  
暖かな空気の中で感じる。

僕のしぼんだ心があまりにも早く年をとってしまい  
この先走った嘆きで  
甘美な日が過ぎ去ってしまったのを

辱めてしまうとしても

僕が冷たくなっているのを見て嘆く人もいるかもしれない。  
嘆いてくれる人もいるかもしれないのだ。というのも、僕は  
人に愛されずとも、哀れには思ってもらえる人間だからだ。  
太陽が穢れない栄光を誇って沈むとき  
記憶の中に息づく喜びのように、人を楽しませながら  
名残を惜しむこの日とは違うのだ。

「苦境―断片」

さあ、仲良くしよう。近くで腰を下ろしてくれ  
影をまとった「苦境」よ。  
内気だけれど言うことを聞いてくれない、無口な花嫁よ  
誇りという衣を身に付けて  
理想化された孤独を嘆いている。

さあ、仲良くしよう。近くで腰を下ろしてくれ。  
君には僕が悲しんでいるように見えるかもしれないけど  
君よりは陽気だよ。  
尊大な顔つきが悲痛で  
彩られたご婦人よ。

「苦境」よ！僕たちは何年も  
きょうだいのように  
わびしいひとつ屋根の下で  
暮らしてきたね。僕たちはこれらの歳月も

一緒に暮らしていく覚悟が必要なんだよ。

不幸な運命だけど

これを精一杯活用しよう。

喜びが息絶えても愛が生き長らえているなら

僕たちふたりとも愛を貫いて、仕舞いに僕たちの眼には  
この心の地獄が楽園のように見えるのだ。

さあ、仲良くしよう。君は

新しく刈り取られたばかりの草上に横たわるといい。

バッタは陽気に歌を

歌って、悲嘆の多い

この世の中でも喜びに溢れている。

僕たちの住処は柳でできていて

僕の腕は君の枕になるだろう。

物音も香りも物悲しく

かつては快かったのだから、僕たちを

あやして深くて物憂げな眠りへと導いてくれるだろう。

おや、君の凍った脈拍は

言い知れぬ愛で震えている。

君は何やら口にして、涙ながらに嘆いているのだ。

僕の燃えるような心が横たわって眠る間

君の冷たい胸は激しく鼓動しているのか。

僕にキスを。ああ、君の唇は冷たい。

僕の首に君は腕を回してくれているのに。  
君の腕は柔らかいのに冷たくて死んでいるみたいだ。  
そして、君の涙が僕の頭に落ちて  
凍った鉛の先のようにひりひりとした痛みを与える。

花嫁のベッドへ急げ。  
墓の下に及んでいるけれども  
暗闇に僕たちの愛は隠れているかもしれない。  
忘却が僕たちを覆っているのだ。  
僕たちが休息を取っても、皆許してくれるだろう。

僕の手を握ってくれ。僕たちの心が  
ひとつになったふたつの影のようになるまでは。  
こんな風に恐怖で我を忘れた精神状態が  
いつまでも続く眠りの中で、蒸気のように  
薄らいでいくまでは。

僕たちは長いこと眠ってこんな夢を見るかもしれない。  
自分たちは涙を流して嘆いてなどいない、と。  
人生を葬る君のことを  
「苦境」のことを、喜びが夢に見るように  
君も僕と一緒に喜びを夢見るかもしれない。

月明かりの雲は、幽霊のように経帷子をまとい  
夜中に群衆の間を流れ去る。  
そんな雲に向かって、犬たちが吠えるときも  
僕たちは笑って、地上の暗がり

陽気になろう。

僕たちの他に広い世の中が  
ある場面から通り過ぎていく多数の  
操り人形のように、姿を現す。  
彼らから見て、僕の状況は笑い草以外の  
何だろうか。君はどこへ行ってしまったのだろう。

「世界はわびしい」

世界はわびしく  
メアリ、君なしで彷徨うのが  
もう辛い。  
少し前は魂が  
君の声や笑顔の中にあっただのに。  
たとえ僕が死んでも、なくなったままだろうな。

ああ、なぜ僕たちは  
世界の冷たい胸の上になければならないか、  
僕たちを祝福する温情なんて失ってしまっているのに？  
君の名前はすみれの香りのように  
風に乗って突如として漂ってくる。

ああ、僕も  
輝くような日を一瞬捉える霧のように  
鳥たちの子守歌とともに

なくなってしまうればいいのに。  
鳥たちだって  
自分たちの旋律を胸に死んでいくのだから。

「いとしいメアリ、君はどこへ？」

いとしいメアリ、君はどこへ行ってしまったんだ  
僕をこんなわびしい世界に置き去りにして？  
確かに君の姿はここにある、いとしい…。

だけど、君は捨て去ってしまった。わびしい道を進み  
「悲しみ」のひっそりと佇む住まいへと向かう。  
君は青白い顔をした絶望の暖炉に腰を下ろす。  
もし…  
君のために僕がついていけない所なら  
僕のために戻ってきてくれ。

「君は幸せな時間を忘れるのか？」

僕たちが「愛」のあずまやに埋葬した  
幸せな時間を君は忘れるのか  
土の代わりに花と葉を  
亡き骸の上に積み上げて？  
花は倒れてしまった喜びで  
葉はまだ残っている希望だ。



死者を忘れて過去を忘れる？ああ、だけど  
死者は過去の仇討にくるかもしれない幽霊で  
記憶は心を墓にする。  
悔いは精神の暗闇をすべるように動いて  
気味の悪いささやき声で  
喜びはいったん失われると苦痛でしかないと教えてくれる。

「こどもはお腹の中で安らかに」

子どもはお腹の中で安らかに  
亡き骸はお墓の中で安らぐ  
僕たちは終わらせることから始める

「亡きウィリアムよ、お前には」

[ウィリアム・シェリーへ]

(なけなしの真実で僕はこう言うかもしれない—  
ローマ、ローマ、ローマよ。  
もはや以前のような姿ではない。)

亡きウィリアムよ、お前には  
輝かしい精神が息づいていて  
そのきらめきをかすかに隠していた  
朽ちゆく衣を使い果たした。  
ここにそんな精神の亡骸が墓を見出しても

このピラミッドの下には  
お前はいない…。もし、神のようなものが  
お前のように死ぬるのなら—お前の聖堂は  
お前の母と僕の胸にあるのだから。

お前はどこにいる、心優しいわが子よ。  
こう考えさせてくれないか。お前の精神が  
懸命で温和な生でもって  
ここにある墓や荒涼とした廃墟に囲まれた  
瑞々しい葉と雑草の愛を養っている、と。  
また、一部分が  
芳香のある花々や陽光に照らされた草の  
脆弱な胞子を通して  
こんな色合いや香りへと  
変化していく、と。

## 2. 作品執筆の背景について

「失意のうちに書かれた詩節—1818年12月ナポリ近郊にて (Stanzas Written in Dejection – December 1818, Near Naples)」

パーシーは1818年12月1日から1819年2月にイタリアのナポリに滞在しており、本詩は1818年12月に執筆された。本作品の冒頭における描写は、パーシーから友人トマス・ラヴ・ピーコック (Thomas Love Peacock) に宛てた書簡の内容と一致する。1819年1月23日から24日のピーコックに宛てに書かれた書簡の中で、パーシーは12月22日にボンペイを訪問したことに触れている (*Letters of Percy* 71)。そのときパーシーが目にした風景描写の中に、「日は輝くばかりで暖かい (The day was radiant & warm)」気候や「深紅に染まっ

た真昼の天を映す海 (the blue sea reflecting the purple heaven of noon) 」及び「暗く荘厳なソレントの山脈 (the dark lofty mountains of Sorrento) 」と「降り積もったばかりの雪で筋状の模様が付いた山頂 (their [mountains of Sorrento] summits with streaks of new-fallen snow) 」などがあり (*Letters of Percy* 73) 、本詩冒頭における詩行1行目から4行目の「太陽は暖かく、空は晴れている。／波は燦々と輝き、目まぐるしい動きを見せながら踊っている。／青い島と雪で覆われた山は／深紅色をした、真昼の透明な力をまとっている (The sun is warm, the sky is clear, / The waves are dancing fast and bright, / Blue isles and snowy mountains wear / The purple noon's transparent might) 。」と内容的にも一致する (“Dejection” 1-4) 。しかし、この詩で言及される「失意 (dejection) 」は、次女クレアラの死やそれを受けたメアリの落胆に付随して、パーシー自身がナポリ滞在中に抱えていた健康上の問題や精神面での葛藤を表している。また、クレアラの死とメアリの落胆の他に、この頃のパーシーは「ナポリの赤子 (Neapolitan baby) 」事件に関わっていた。1818年12月27日に、「エレナ・アデレード (Elena Adelaide) 」と名付けられた子どもがパーシー夫妻の間に生まれ1820年7月10日に没したとされているが、この赤子は明らかにメアリの子ではないとされている。この赤子をメアリから見て義理の姉妹クレア (Claire) とパーシーの間にできた子とする説もあるが、この説も信憑性が低い。クララを失った悲しみに暮れるメアリにパーシーが養子をとったのではないかととも言われており、件の赤子の正体は実のところ不明である。いずれにしても1818年12月はパーシーにとって、メアリとの関係を含めて精神的に難しい時期であり、自らの個人的な感情を抒情詩という形で公にしようとしたとしても不思議ではない。

#### 「苦境—断片 (Misery. – A Fragment) 」

本作品は1819年7月にイタリアのリヴォルノで執筆されたとされている。6月7日にローマ滞在中、長男ウィリアムを3歳半で亡くした後、メアリが鬱

状態に陥り、パーシーとの関係も悪化したことを受けた内容となっている。本詩で言及される「わびしいひとつ屋根の下 (living in the same lone home) 」や「新しく刈り取られたばかりの草 (the fresh grass newly mown) 」, 「柳 (the willow) 」は、パーシーたちがローマを出た後6月17日に到着したりヴォルノ近郊のヴィラ・ヴァルソヴァノ (Villa Valsovano) における風景を表している (“Misery” 13, 22, 26) 。

「世界はわびしい (The world is dreary) 」

本作品の冒頭6行はメアリによって1840年に出版され、執筆時期は1819年7月とされている。本詩で描かれるパーシーとメアリの関係は1819年6月7日にローマ滞在中に長男ウィリアムを亡くした後にメアリが抱えていた精神的苦痛を反映している。

「いとしいメアリ、君はどこへ? (My dearest Mary, wherefore hast thou gone) 」

この作品は1819年7月もしくは8月にリヴォルノで執筆され、パーシーの死後、1840年にメアリによって出版された。7月に長男ウィリアムを亡くしたメアリが深い憂鬱状態に陥ったことをパーシーの視点で描いた作品である。これを裏付けるように、1819年8月5日にパーシーは、ジョン・フィルポット・カラン (John Philpot Curran) の娘で芸術家のアメリア・カラン (Amelia Curran) 宛の書簡においてこう漏らしている。「メアリは未だにひどい抑鬱状態で、[...] 他の人には想像もつかないほどだ (Mary's spirits still continue wretchedly depressed – more so than a stranger [...] could imagine [...]) 。」 (*Letters of Percy* 107) 。このようにパーシーの視点から、メアリが当時大きな精神的葛藤を抱えていたことが窺える。なお、翻訳において「…」で表した箇所は、原典テキストにおいても空白になっている。

「君は幸せな時間を忘れるのか？ (Wilt thou forget the happy hours)」

本作品は1819年8月後半に書かれたと推測され、この作品の醸し出す雰囲気もまたウィリアムの死、メアリの抑鬱状態、メアリとパーシーの関係悪化を反映している。1819年8月15日に友人のリー・ハント (Leigh Hunt) 宛の書簡で、「かわいそうなメアリはひどく落ち込んだ状態が続いている (Poor Mary's spirits continue dreadfully depressed) 。」とパーシーはメアリの抑鬱状態に言及する (*Letters of Percy* 109)。その後、パーシーは8月24日に友人ピーコックに宛てた書簡の中で「僕たちの亡き縁者たちが幽霊となって現れてつきまとう。僕たちが彼らを飢えさせ、見捨てて死に至らせたことを復讐しようとしているんだ (the ghosts of our dead associations rise & haunt us in revenge for our having let them starve, & abandoned them to perish) 。」と述べ、メアリの抑鬱状態のみならず、パーシー自らの精神的鬱積も示唆している (*Letters of Percy* 114)。

「こどもはお腹の中で安らかに (The babe is at peace within the womb)」

パーシーとメアリは1819年6月に長男ウィリアムを亡くし、同年11月12日に次男パーシー・フロレンスを授かっている。本詩はその間に書かれたものとされている。

「亡きウィリアムよ、お前には (My lost William, thou in whom)」

この詩は長男ウィリアムの死を契機に書かれた作品である。1819年5月27日シェリー夫妻がローマに滞在中、ウィリアムは病にかかり腹痛を訴えた。スコットラド系移民のジョン・ベル医師 (Dr. John Bell) は当時パーシーの掛かり付けの医者であり、ウィリアムの治療に当たった。ベル医師の治療の下でウィリアムは回復したように思われた。しかし、6月2日にウィリアムの病状は悪化し5日後に亡くなる。当時ローマで流行っていたマラリアではないかとされている。ウィリアムは亡くなった翌日、プロテスタントの共同墓地に埋葬

され、その2日後にシェリー夫妻がローマを出る。この作品の執筆時期は、ウィリアムが亡くなった6月7日の真昼から、シェリー夫妻がリヴォルノにおけるヴィラ・ヴァルスヴァノ滞在了最初の週末までの間だろう。そうすると、本詩の6行目で言及される「ピラミッド (pyramid)」とは、ケスチウス (Cestius) のピラミッド近くに埋葬されたウィリアムの墓地を指していると考えられる (“My Lost William” 6)。ケスチウスは古代ローマの政治家で、その死後に建てられたピラミッドは30メートルにも及び、紀元前1世紀末に建てられる。パーシーもローマ滞在中にこのピラミッドを訪問して、1818年12月17日もしくは18日に友人ピーコック宛の書簡で、ケスチウスのピラミッド下にあるイングランド人用の墓地は「今まで見た中で最も美しく荘厳な墓地 (the most beautiful & solemn cemetery I ever beheld)」と言っている (*Letters of Percy* 60)。

1819年6月にシェリー夫妻はウィリアムを亡くした後、墓に建てる記念碑の手配をする。夫妻はウィリアムの生前、5月中旬に芸術家アメリア・カランにその肖像を依頼しており、メアリは6月27日にリヴォルノからの書簡でカランに墓石に飾るウィリアムの肖像について相談をしている (“Let us hear also if you please – anything you may have done about the tomb.” [*Letters of Mary* 100])。これに対してカランは8月5日までに2つの肖像画を夫妻に送るが、いずれも夫妻の好みには合わなかった (“nor indeed perhaps, any attempt at *Sculpture* seems to me fit for the purpose” [*Letters of Percy* 107])。そこでパーシーがカランに、ウィリアムの墓石は「白い大理石のピラミッドで飾りがなく、最も長持ちする形状でなおかつ、最も簡素な外見のもの (an unornamented pyramid of white marble as of the most durable form & the simplest appearance)」にしたいと提案する (*Letters of Percy* 107)。さらに9月18日の書簡でメアリがピラミッドは最も長持ちして簡素な記念碑のスタイルで考えている旨を伝え、「25ポンド英貨で購入するなら、大理石でしっかりとした材質のピラミッドはどのくらいの大きさになるのか (What would be the size of a pyramid built of the most solid materials & covered with white marble at the price of

£25 sterl[...]?」)と尋ねている(*Letters of Mary* 105)。その後、11月18日にパーシーは、「大きめのピラミッド(The larger pyramid)」にしたいと言う(*Letters of Percy* 159)。おそらくケスチウスのピラミッドを模したものにしようという意図があったのだろう。いずれにしてもこのあたりの時期が、本詩の執筆時期と推測される。というのも、1820年1月19日にメアリがカランにピラミッド作成の進捗状況を遠回しに尋ねているが(“Pray let us hear from you soon as I am anxious concerning your health & mention the subject of Shelley’s last letter”[*Letters of Mary* 127])、6月20日に墓石の完成が難しいことを踏まえて、「簡素な墓石(a plain stone)」でウィリアムの名前と生没年「ウィリアム・シェリー、1816年1月24日～1819年6月7日(William Shelley born January 24, 1816 – June 7 – 1819)のみを記すものにできないかと提案しているからである(*Letters of Mary* 150)。しかし、ウィリアムの死体はどこかに紛れてしまう。ウィリアムの墓とされていた場所は、1823年1月には開放され、遺体は別のプロテスタントの埋葬地に移された可能性が高い。

\*翻訳の底本としては以下の参考文献に記載の第一次文献を用いた。なお、作品執筆の背景についても同様に以下の文献を参考にした。

## 参考文献

- Curran, Stuart. *Shelley’s Annus Mirabilis: The Maturing of an Epic Vision*. San Marino, Huntington Library, 1975.
- Shelley, Mary. *The Letters of Mary Wollstonecraft Shelley*. Ed. Betty T. Bennett. Vol. 1. Baltimore: Johns Hopkins UP, 1980.
- Shelley, Percy Bysshe. *The Poems of Shelley*. Eds. Jack Donovan, Cian Duffy, Kelvin Everest and Michael Rossington. 4 vols. Harlow: Longman, 1989-2014.
- . *The Letters of Percy Bysshe Shelley*. Ed. Frederick L. Jones. Vol. 2. Oxford: Oxford UP, 1964.